



ブーゲンビル島沖航空戦に奇す。 眉筆

一 沈み入りく アメリカ太平洋艦隊は

ブーゲンビル沖 すぐ波向に

微塵に碎け没し去りぬ

この時、日と忍びたり 熱功高の海、荒れ島

十載不朽偉業は香が、ラバウル海軍航空部隊、

二 撃ち入りく 脚下に迷不敵艦隊を

必殺雷撃 撃ちて止まむ

全艦殆んど破り去りぬ

この時、日と忍び入り 熱功高の海、荒れ島

十載不朽鬼神と強し うらら海軍航空部隊

三 雄々しかり 峯に羽傳く海の荒れ島よ

太平洋の 國を護りて

皇天の 運命 塔を

この時、日と忍び入り 熱功高の海、荒れ島

十載不朽空の鎮りぞ うらら海軍航空部隊

四 万才ぞ ブーゲンビル沖 勝鬨を

五十余隻の 不途の 仇を

沖の夕陽と 島らかに

この時、日と忍び入り 熱功高の海、荒れ島

十載不朽偉業は香が、うらら海軍航空部隊

十一月十八日 カミサブーゲンビル沖航空戦、戦果に

感謝しつゝ 記す

十月二十一日（晴天）

この日遂に海兵穴大破。決心と足む。
只この上は一意誠心。断じて頑張り抜く決心也。
力足らずば玉碎あるのみ。
行くを断じて行くを。嗚呼！
人生僅か二十五年也。

誓って江田島湾頭に凱歌を奏げん。
我この日遂に海兵穴大破の決心を足む。

思ふこと母見かずして止まぬこそ

大和男子の心なりけり

（明治天皇御製）

一粒の麥地に落ると死ぬすは生とす

點滴 穴牙之白

断じて行へば鬼神も之を避く

日本刀

鍛冶研磨幾百回。霜降三尺玉無埃。
不疑日本刀鋭利。曾試磐根錯節來。

Success comes to him
who faints not!

全、大暗記といける。新呼排弁すべし也。

満点とて位、愈々なるものなり。大暗記入こそ、最善の方法であら。然し、
學向即戦争の世の中、一夜讀主義學、断じて許さるる。

事此處に至り、我輩、草率、草率、總括的學向、こゝを、學向と受えたる
もの、最上、方策である。無間天踏の暗記する。思ふ、準備法
と根本的、高價（こゝろを、まあ今日、試して、九分、成功を成るべし）

まを、中々、いゝ、こゝろ、こゝろ、地理にも、や、見、し、し。

代野の方は、あまり準備はなかつたが、全部あまる。答、か、も、大伴、こゝろ、
も、残、り、も、向、題、の、幾、何、の、工、曜、の、断、じ、て、頑、張、ら、せ、ぶ、ら、ぬ。

その口語、地理、打僮、試験、何、差、買、下、す、ま、る、か。

今日、オチ、若、こ、に、級、校、入、試、の、難、難、と、も、新、然、理、後、者、確、と、す、
こゝろ、初、末、す、後、用、介、ら、い、り、け、り、よ、り、留、子、の、本、理、方、一、休、し、よ、り、

丁一月三十日（火） 恨晴

朝、余、リ、気、分、良、り、し、況、こ、人、下、さ、ん、時、向、い、ん、ぐ、お、七、三、と、數、く、
に、至、り、今日、日、全、し、皆、ら、し、余、程、こゝろ、と、歌、目、を、こゝろ、

今の君、道、カ、カ、い、何、處、も、入、こ、ら、ぬ、こゝろ、こゝろ、いつ、も、言、ふ、や、う、に、一、年、分、
の、勉強、は、三、月、分、つ、つ、り、や、か、は、逆、取、り、ま、る、こゝろ、こゝろ、

その時、限、キ、ン、コ、模、型、航、空、機、根、本、理、論、の、解説、の、長、講、
四、時、限、書、道、は、清、書、春、水、漏、り、夏、會、多、奇、筆、

五、時、限、ガ、ン、コ、ト、六、時、限、全、校、教、練、終、こ、い、一、番、校、内、を、す、つ、飛、ん、
出、さ、し、後、の、こゝろ、い、薄、く、ハ、ヤ、イ、カ、キ、ト、呼、ぶ、誰、か、と、思、つ、つ、

田、中、ら、い、伯、氏、も、歸、り、の、ら、う、早、い、か、い、と、馳、り、て、来、こ、の、事、
二人、で、明日、勤、勞、奉、仕、の、少、し、雇、て、行、く、事、申、こ、う、と、伯、氏、快、談、

夜、は、口、四、の、試験、準備、十四日、ウ、イ、ク、タ、ー、行、か、す、と、も、う、あ、と、少、し、
二、學、期、と、お、別、れ、か、文、に、短、い、こゝろ、こゝろ、こゝろ、

二、學、期、と、お、別、れ、か、文、に、短、い、こゝろ、こゝろ、こゝろ、

十二月一日 (水) 晴

聖徒出陣の日。世界最強神州聖徒出陣の時。来り
怖小。米鬼。莫度。高。辺。ち。理。任。培。小。念。そ。小。と
戰陣。皆。得。り。彼。の。聖。徒。の。正。に。世。界。無。比。だ。！
征。小。の。聖。徒。！。日。本。の。民。！。絶。入。る。期。待。と。雙。肩。の。負。ひ。て
堂。々。征。小。我。も。續。く。ぞ。と。續。く。ぞ。！。断。て。續。く。ぞ。！！

今日の火の用心始り。子供隣組有りと。戸締り用心！火の用心！
と又二月迄やろて。

十二月二日 (木) 快晴 風甚ク強シ 霜降リ

白霜降り寒風肌を刺す。然し乍ら南窓の暖か
さ。ソ。ソ。ソ。の。孤。軍。奮。闘。の。勇。を。思。ひ。馳。す。

何の小しき。断じて頑強の。一途の。か。磐。石。根。錯。節。世。々。な。う。と
戦果の。酔。ふ。ら。非。の。民。の。力。一。を。も。つ。況。ん。や。莫。大。の。心。也。

言はずもが。口。口。を。お。ぶ。る。に。精。進。攻。の。熱。心。さ。の。み。也。
本日才五。の。時。限。前。陸。軍。第。一。師。団。少。佐。友。社。主。筆。一。

内山某の某校。の。心。を。知。解。し。不。さ。け。の。心。化。り。不。陸。南。方
方面。の。視。察。の。得。を。体。験。記。録。の。人。の。心。を。知。解。し。不。さ。け。の。心。化。り。不。陸。南。方

陛下。不。東。亞。指。導。民。族。と。して。大。陸。南。方。面。に。活。躍。せ。り。日。本。人。の
少。す。も。言。派。の。日。本。人。と。は。な。ら。ぬ。誠。の。微。の。た。ら。し。も。て。あ。る。

不。日。本。帝。國。の。臣。民。と。して。自。覺。が。足。ら。ぬ。南。方。住。民。事。は。今。こ。そ
日。本。人。の。一。舉。一。動。に。注。視。せ。て。お。る。か。を。お。も。ひ。な。す。指。導。者

として。日。本。人。の。使。命。と。す。一。指。導。者。の。夢。を。い。い。て。お。く。緊。要。事。手
ある。日。本。人。と。して。自。覺。指。導。民。族。と。して。自。覺。せ。よ。
陛下の状況は。口。口。の。概。観。に。堪。え。ぬ。身。も。此。處。に。於。て。
帝都。の。心。を。指。導。の。地。に。日。本。文。化。の。中心。地。に。か。も。派。の。教。育。と
愛。の。君。が。新。鮮。な。熱。心。を。意。義。頭。悩。み。以。て。こ。り
日。本。人。と。して。自。覺。の。心。を。戴。きた。南。方。の。信。念。の。こ。り。意。義。地。の。

六角塔と青空のそと、夏空の雄偉な立止り也。西段岳、霜降と踏んで
見よ。前道する健児、双観。朝日、映え、衝攪。春。今朝は一切、
輝き見え。何物も踏倒す。銘傳名人。心気元。銘血天の湧り
今世曾て。歩武堂の。盛行あり。大つら。尺。日。朝
世界史に一新紀元と書す。大御戦、感忠。日。朝。

十二月十日 (金) 晴 寒風甚し

南東学院中学部 昭和十八年度査問足施せり
査問官 東部部員 部隊長 銀田久佐殿
分列 健児 共々 優良 成績 往年。三春健児。
是元口 記す。ホホ。

才学手 叙評 奨励 口 概ね 良好 認められ ます 無難。
早朝より 寒風 刺す ところ 斯く 如く 成績 得る こと 全格 一致 っ
賜ふ こと 栄誉 心 一致 する こと 又 印 する こと あり ます。

十二月十二日 (日) Merry fine

今日の朝 五時より 少年団 神社参拜 (浅南神社)
寒風 刺す 鋭信、少年少女 是元 元 元 元
午前一時より 分東神奈川 谷々 田中 人々 山下 一人 勤勞 奉化
に 赴く 又、ボート 満腹 感に 祈り する こと あり ます (拒振)
三月 年々 上 屋の 戴く こと あり ます 息也。

十二月十七日(金)

愈、今日から日本音響株式会社(勤労奉仕行)三日。

終業式前日迄、その間十八日、休日に戻り、休日、その代り十九日(日)

日就業、芝浦・田奈部隊、農家は佐川作業等、多忙なる、今学期

・作業日割、今日より又一週を加へて、終止行か?

然し正月の作業がなくてのんびり出来るのも嬉し。

何しろ殺人的なスケジュールのおまけは、口平のコレ、そして歸途のそくに優る

とも劣らぬ混雑、日頃、産業戦士諸君の苦労の程、察するに余りある。

芝浦の「根岸さん」「三上さん」田奈部隊の(笑)「岩崎さん」「鈴木孝治さん」

瀬谷の「勇さん」等、勤労奉仕に行くときつと、印象が深い人にお会い

沢山の人の中で、強く頭に浮かぶ、忘れられない人、その小ぶり、特異的な性質の

持主なのかも知れる。今日の作業は、その特異な印象、深い人々

居る。「手には?」のをいさん、「パンチン」「毛鳴さん」を、殊に「手には?」に

忘れられない人なり)

十二月十九日(日)晴

休十八日、休電日、休つて今日、日曜就業

朝より、張切って、能率100%。成果を今付け、

その為、歸途ですと、ぐっすり疲れて、勉強、方口受!

八代、言葉業を思ひ出す

「君は、学徒だよ、勤労奉仕に行つて、いこう、疲れても、学徒、本分

である、勉強の力は、平常中通りやら、なくては駄目だよ、

強念であるが、体が言いかまきかぬ、ううめし、この八代

あ、疲れる、(眠、) 里人に眠、

机に向き、全無、人の用、了つて帰ると、何も、そく

なし、もつと、ヤリを、えい、えん、合するのぞか、...

わい、(とまらぬ、) 畜生、

残念、口惜、歌、品、...

十二月二十日 (月)

噫！南島の海を真紅に染めて。海中か小 大君の過にこそ

水漬、屍 壯烈、玉碎せし、マギン、タラワ 西島 舟備、海軍

陸戦隊 三千名 及び 協力奮戦せる 千五百名、軍艦、

千古に香る 歎口 本日 三時十五分 大不意より 奪去せし

一億とて 未爾然 襟も正 こそめを かくありと口 予想して 居つて

と口云へ 何ぞ 壯烈、 我ら 断じて 怨敵 未だ 撃滅せしん

口止まじ 笑にアツツ、 悲報あり、 今亦 二、 悲報に 接し

我らの 情教 頂点に 達す

火の用へ 巡廻 前 子供隣組 集合

柴崎海軍少将以下、英靈

対して 宿敵米鬼 必ず 打ち破ります 決意をこめて 神念を 携け

こ海の中を 一喝 少口民の 意気 口 壯なり

今亦 我南ナリ、 水漬く 四千五百、 英御靈よ

遠く 祖口を 距る 數千軒、 小島に

數十倍の 米鬼と 一拳に 屠り

我が身又 敢然として 玉と 碎けし

御身より 紅き 真心は 人々 と 燃えまつて

御身より 銃 劍は しっかりと 握ら小エの ぞり

御身より 受す 祖口、 爲 するまなかつて

御身より 大君の 迎にこそ 何物も 惜しまなかつて

續くぞ、 断じて 續くぞ、 四千五百、 水漬く 軍神の

最後。 定事、 續くぞ、

噫！ 怨敵 メリケン 奴！ 覚悟口 よいか

四千五百に 代り 全一億、 總突撃と 受けて 見よ

十二月三十一日(火) 快晴

勤勞奉仕 才四日。昨夕、マキシタワリ、王奔と聽し、一層の働、甲斐と覺や。この上は所期の目的に向つて、徒らに徒手空拳と歎いてあり、場合によらず、まじく、我らの時代があるのだ。まじくと来るのだ。吾來るけ小はるうぬのどよし。その時こそ、暴戻、米鬼、奴ノ、賞えて居小い。この腹で、必ず見参するぞ。此處は三日。悲報に口尻の意氣消沈してゐるの感あり。こんな事では、秋目也。一喜一憂、交は、戦、平、尙、王奔、勇士、三、此、わ、る、う、ぬ、南、ま、を、す、は、必、ず、後、に、續、く、人、々、と、朋、待、こ、後、冬、死、に、赴、く、を、す、期、待、に、北、背、の、総、力、を、奪、つ、て、全、身、全、力、を、奪、つ、て、頭、借、つ、つ、を、こ、え、こ、え、南、海、。王、奔、勇、士、は、真、す、る、を、ぞ。

十二月十四日(金) 曇天

噫、待ておれ、待ておれ、全日本の若人は待ておれ。この日この時、全若人は歡喜せよ！果せる哉、若人の歡喜は、絶頂に達せし。俺もその中の一人だ。潮の如く、出で行く先輩諸兄の、激しい氣魄に、左倒、まておれ、自分どうぞか。今こそ、何もかも晴れ、征とぞ！、断呼して。我らの前途には、雲霞の如く、メリケン野郎が、構よしぬ。我らの前途には、アカカ本土が、爆撃を待てぬ。我らの前途には、無敵の、メリケン軍艦が、沈没を待てぬ。よし、一、偉大なる、神口日午、光榮を、躍進、持、に、生、を、享、け、し、この感激、覺える租口、十有八年、向平穩に、言、ん、で、兵、小、を、租口、この租口、日午の爲に、我らは、征、の、を、何、も、を、光、榮、を、馬、鹿、野、郎、の、メリケン、アングロ、迷、れ、ん、暗、愚、槽、を、暫、く、待、て、し、その中、に、は、鉄、の、一、拳、を、受、け、て、見、よ、し、ま、つ、て、是、を、舞、小、を、メリケン、アングロ

俺は征くのを 光榮する 租口の爲に 偉大方の租口の爲に
全一億の信望は 双肩に輝いてゐる 畏れも大君の御信賴はニリ
俺達に這 撃つるのを 海行かば 山の中は 大君の御信賴はニリ
勇んで死ねようぞ

「俺が行くぞ お前も来るか」 「うん！ 俺も行くとぞ」
何處か、 勇んで来るとぞか 租口を汚してなるもか
不侵の口 不震の口 大日本常口 万才

(十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四) 徴兵通齡一年以下 満十九才検査の報告書

十二月二十五日 (土) 曇時々晴

謹みて大正天皇祭の佳き日を迎ふ

前より克ふんラバルより 輸送船補給の 人任と果して 歸る
輝くその使命と 無事！ 果して 次々大任の爲に 二日中休養
か出るとぞ

日の下、 男子と我も 謳はれ
いづく。 波に 砕け散るとも

すつかり 変つて 克ふんを見ても 益々 我も 征かむの心を強く
する 若き人々の 續々と出て 出て行く 取り残される 感は口
俺の心には一杯

十二月二十六日 (月)

午前十時より 横浜家庭学園オニ学期終業式
及午後一時より 同学園オニ祝会に出席す
降誕祭礼拝

- 一口尾儀礼
- 一 頌
- 一 聖書朗讀 ルカ傳 第二一章
- 一 祈禱
- 一 讚美歌 八八
- 一 説教「主の祈りに就て有馬園長」
- 一 讚美歌 一一〇
- 一 祈禱
- 一 讚美歌 八八

五十分休憩。後オニ部に入

才三郎の合唱劇遊戯集ニ日と衆に練習を重ね

團思を多し一心不乱の演技に心と蒸かす

神様の口はんとお喜びなさいと違ふ世に
就中劇「良きサマヤ人」は衣粧して食こと口ふへ少からず感激

す。一所懸命に小まき草と合せ 願く幼思の舞踊
まこと云へ前保の兵隊さんに感謝しつろ 衆こま一時を迎へ

得を 喜び 神様の 實まお恵み 何々感謝してよりのどうが
ニハモ 祝日奉告の口をみまわすお礼 感謝 感謝 感謝

午餐会の御料理は美味こころ 天下一品
園遊係者、限りなく 御歌行と共に 忘れず小ぬ

前田正三の人の芝居 傑作 先生にこまきや 器量が
あつたは思ひのこころ

正三にのり 衆こころ 日を送り 感謝こころ 退園す
極壇も相ま 嬉しかったをい見え 一。五番を 高唱しつろ

何んかに清く時小波、輝く星を 仰ぎ 心から ぼぼ日を祝す
通辞は二時半

毛むしこ 芝居の 退りつろ
ひさしく 待たにし 主のまをせり 主のまをせり
主の 主の 主のまをせり 感謝のり

十二月二十八日(火) 晴

昨日山下さんから持って来た餅と 道子(持て行く
そこで 正月島のアリ坊に合ふ 足に 奇道ク!

お正月の道子ひするところ 然し 大儀以来 何年目か
約五年目、解散し お互に、成長に驚く

舟小學校三年、時別小 今の女子専門の一年
大儀北餅倉 よく 喧嘩をしをもうか 然し 今合つてみれば

懐こい 足に 懐こい あの時、ころ 万事柄が思ひ出
さる。夕御殿 スキヤキと 馳走りなす

十二月三十一日(金) 晴

偉大なりし昭和十八年、今ぞ行く

山本元帥の散華あり、アツクの玉碎あり、イタリヤ、アドリア政權

の裏切あり、学徒徴兵、増隊停止あり、吾、学徒出陣あり

ブーゲンシュン沖大戦果あり、大東亜会議の盛典あり

ビルゴ、フィリピン両口、独立宣言あり、そして、タラシ、モシ、西島舟備

陸戦隊の玉碎あり、徴兵二年断、中一年^休あり

かくして決戦昭和十八年、暮かて行く、今こそ、静かに退き行く

何ぞぞ、得作、知れぬ大なるものをしつかり抱いてやるやうぞ

次は起つべき躍進の時、脈一不にたくましく、ゆるやうぞ

噫、何もかも昭和十八年の退き去つるものは、大まかろぞ

そして、その偉大なる年は、今、静かに退き去らんとしてゐる

静かに、是に静かに、帰るこゝ程、静かに、

躍動する前、静かに一時、

何事もなかにやうな静けさぞ、ニホが果て、涙なる

昭和十八年、あゝ、さうぞ、決勝、一歩を踏み出す

新走日は明日ぞ、決勝ぞ、昭和十八年、吾等、吾等、一億

決死の進軍の杖ぞ、今此處に、静かに、退きやく

昭和十八年を送るのを、然し、余りに静かに、

帰るこゝ程、静かに、

○限りを盡したる西方に、しき島あり

大和島根、つまかやなり

○西の海、よせくる波も、心せよ

神のまも守る、やまと島根ぞ、

昭和十九年一月一日

一月一日 (土)

君がニク花と歌りにしませうをに

見せばやと思ふ 御代の春かな (加納諸平)

粟みこし 吾人君のこまませる

御口の中をかに春は春にけり (八人倉証鳥天)

初春、初日かよふ 神口の

神のしかやうあふげ 諸 (兼木田久老)

春にあけてまづみる書も天地の

はじのり時と讀け出づるかな (橋曙賢)

新しき年のはじめに 西暦・年

しるすとならぬ 雪の降小るは (葛平諸介)

大なる尺史、且 今日このと明け初めた。

小こさ学を合せて拜む 童心のこのりてゐる。 (天地)

何そ 壯麗な且 心をわら生けるしあり せかやるとそ

にあへらく思へば ひとつりと 宿を帯びて 二日け 街

外口 今 眞紅、太陽は 登り初め

子供達の 懸念に 拜んでゐる 征まし 父 兄 亡くさし 父 兄

よせ、この私と 育んぬ 異小まこる 有難小まこる

子供は 眞剣に 拜みよつて 上げを 瞳、 眞無垢な

その瞳 彼らは 泣いてゐるを 涙を 見えぬが 彼らは 泣いてゐるを

大口難、中には 育つたを 深刻な 物質難、中には

彼らは 眞赤に 育つたを 蘇つて、 自分と 考へる時

俺は泣けて (仕様がなから、 徒に十有九年も、 他人、作れ

粒米布疋と 戴き、 大人無垢、 何一、 子自由なく 育つ

心、 今まを 爲すこゝろにして 自介、

上●お許し下さい。神はお恵み下さい。

さうぞ。この俺は。このいさむを。子供達。為に。死なせしめらるるのぞ。

この子供達。が。まが。この大口難。中にも。是非に育つて。異水てぬ。

この子供達。は。中を。侵り。口を。守つて。異水に。決つてぬ。

この水。を。この。神。口。は。大。盤。石。だ。さうぞ。俺。は。もう。この子供達。

為に。死ぬ。ぞ。噫。延。は。十。有。九。年。七。の。向。カ。カ。カ。

何。董。一。俺。は。真。す。ぬ。もの。か。断。つ。て。征。つ。か。

何。一。つ。不。安。な。と。平。安。に。育。ん。で。異。水。を。我。が。大。石。は。は。

この。偉。人。な。る。祖。口。日。本。の。為。に。俺。は。思。込。こ。す。る。ぞ。

噫。一。感。謝。の。か。元。丑。記。一

午前八時四十五分 集杏(中庭)

午前九時 新年祝賀式 挙行

南東学院全部門 参加 大講堂にて

君がみがげにさかへつて 仰い今日こそ 尊くすべし

一月二日(月) 快晴

断つて行(は)鬼神亦之を避く

一月四日

軍人に賜りたる勅諭 御下賜記念日

午後八時より 学院合併、盛式 挙行 あり

一月五日(水) 曇 信空

新年宴会。佳。且

午後より伊藤さん、信義さん達と上京。先、毎日天文錦見草。

出て丸内日映劇場にて観映。四時、兼て打合あり。

日本橋三越一階ホールにて伊藤さん夫妻及○○○の夫妻と合ふ

直に人形町末廣亭)に赴き九時迄。果ては笑を續く。

柳好、柳橋(左果(休))、始め大小ハシの家連中。感謝して

午後九時頃 出。

一月六日(木) 晴

有馬氏を訪問。兼て打合中、新年会と同じ。大に騒が且つ

合食。且、歌々。気合を同志一日中。遊水。

一月七日(金) 晴

心もすのそり

一月八日(土) 快晴

才三学期始業式。午前八時集合。校長訓示内容

「合戦一大決戦。秋、草。道にこそは華、出来るのは、心一重に

大敵成り然ら使用してこそ感謝、まじき接し物あり。

我らは、全力を會って、敵米更粉砕。意気と新志にて

一億総力戦、陣頭に立ち、決戦に勝利を齎すやう努力

せねばならぬ。了。大詔捧讀。教務報告あり。

新任、口澤利果氏。挨拶あり。了。校庭集合。分列並に

開演あり。大に決戦下生徒の志気と昂揚す。

一月九日(日) 快晴 なるヒク刻より曇天 雪行と悪し

上海の親爺より來信あり。決戦下生徒としての本心を

家と身と母の牛助とせよとあり。直に返信と書く。

俊の信念と打明し。大に感激して書く。さて親爺

何と云って下さる哉? 河合、叔母さん末息、夕刻遅く迄

居る。

一月十日(月) 夕刻より強風

才は時限天下代 人々に皆を教励す

「決戦、年は君らに取つても決戦の年である。

三の一年間 君らに 細村に遊ばせて 天物狂になつて

勉強せよ 學問途中で 徴用されてもよ 勤勞奉仕に引張り

出されても良し 只 一心になつて 勉強し その時が来たら

面かんで 口象の危急存こ。時に 馳せられ するがけぞ

いかに 細村遊びの 気狂と云はれて見ろ その位 勉強しろ

その位 勉強しろ 着がけが 梁柱を得るぞ 少くも 三組が

いかに 俺も 張り切りよ お前達の 張り切り心 約束せよ

いかに 約束こそからには 少年が 早く通じ 早く大人になるな

いかに 決心であら 少年の 三三持が いかに 頑強小

一同大に 感激す 畜生！ 何か何でも やるぞ

断つて行へば 何查し！ やるぞ

あと余すところ 入ヶ月ノ(一年半) 總力だ

何か何でも やるぞ 決戦昭和十九年 意義深し

頑強ぞぞ！ 負けんぞぞ！ 畜生！ やるぞ

一月十四日(金) 曇

ラバウルに対する 敵の侵攻愈熾烈！ 今月に入り 未だ敵機

機延機数亦百数十機 在ラバウル 我部隊の辛苦 断つて

勇士の 要請に心へおぼれ 一機や多く 一刻でも早く 送らう

勇士の 要請に心へおぼれ 一機や多く 一刻でも早く 送らう

十一日 徴用令に依り 東京航空計巻に入所して 自身係不調で

歸宅 何分、砂浜まで 近家へ静養す可ことの 命

じりと耳を澄ましてらん 南へるぞうらう

「一枚でもいかに早く」と言っている 勇士の聲が

足りぬのだ、少いのだ、勇士達は苦しいのだ

だがじりと泳いでいる 勇士達は知っている 期待しているから

「今に内地の人々が頑張っていて兵隊が 決山の飛行機に

なつて送られて来るぞ、やままで

この勇士の期待を無にしてよ、ものか 否、ハル

この面々に心へるのが 銃撃を穿つ者、軍任務ではあるか

じりと首を澄ましてらん 南へるぞうらう

「書、痕水があるんだ、さあ、又働かざる言っている 戦士の声

頑強つてゐるのだ、産業戦士は死物狂いだ

「今に、飛行機で前線へ勇士が戦つて呉れる、増、メリケン

飛行機を打ち落とす呉れる、さうぞ、もつとそこ送らう」

「戦士、期待は報いらるのだ、直に

この戦士、燃える心口、さつとさつと報いらるのだ

前線、銃後、一丸に燃えて車輪くこの歩調

今、決戦の時来るぞ

一月十七日(月) 曇天 寒風 颯々

今日より耐寒 鍛錬 馳足 行進 開始

本日 午後 授業 無し

歸途 大下さんに会ふ、彼曰く「よし、今日のほう終りか、しつかり

ヤルよ、余曰く「ハイ、ヤリます」

大原幽学

高倉テル著 長篇小説 アルス発行

自序の三本三本の日曜日朝から讀め始めて夕方迄は兎讀こくしつた。

其確たる面白く天木 龍三の「雨」は随分沢山の「~~...~~」がある。

自分も又しく小説の遊んでおもしろい本を讀んで 又別の小説を讀まうと思は
る。山前日取石の「讀んで小説も面白かつた」

世界最初の農業組合を造つて 幽草 轉々として生涯をこくに終る
心境、それから非業の死。 此の作者の特異な書風に書かれておる

作者の愛する歌の書風が愛する歌か 作中の人物が皆愛する歌の
幽草然り 深雪然り 主筆然り ~~...~~ 作者の内然り 筆の

どうせ 幽草の生涯を書けるなら 全生涯を知りて 郷土と生命。 経緯
深雪の ~~...~~ 讀後自分も 痛切に感ずる。

此の作者特有の筆風が 此の作のウラミクスとして 入る社会 周囲の
情勢の手に取らるるに 判る。 余りの 遠縁の 鉄子の「工」の詩

殊各連の語彙もラッソ 簡單に中かろかろか？
何ぞ知らぬか 泣か多し 恨め 誰かか 俺と恨めし云云。 項は判るが

要するに 今迄 全篇向と 世間的 描寫の 欲する 余謀が 多邊を
又 細浦談本の 活きた 世界を 通して 通は ちいさ...

結論として 先朝林組合 成立迄、幽草の 辛苦 師提泉の あり方に 於ける
生活 上 際々として 幽草が 果して 上の 偉人なる 哉？

然し 階級も 偉人と 浅く 史更 かつ 二小で 紹介させ
作者の 努力は 偉く あり 農人の 口の人本 である。

いつに なるも 農業の 口、源泉 である。 此の 意味に 於て
この 書は、 もつと (多く) 人が 讀んで 欲しむ と思ふ。

この 作者の 特異な 筆風を 知って かう なるは 大に 讀んで 来る。

一月十八日(火) 晴天

在るは航路。大會戰 未幾敵機三百機。中一二機(五割強)撃墜
又先十四日。敵機は更に三十三機撃墜(加)合計九十九機撃墜
正に怖る可し。海軍は驚。敢闘振り。不日大本營より發着する。
吾々の感激 更に彌増す耳。才一期特別幹部候補生志願 生徒總より起
大令。明日市内西下生徒王勳員。松竹映画劇場で發行する。
銃修生徒ももろ勇んで才一期に馳せ参する(一) 特幹ニシテ 單に五百人に
期待すも 唯一期に過ぎず。行こう 特幹へ 起す可し 特幹へ
一月十九日(水) 快晴

特別幹部候補生志願 生徒總より起大會 松竹映画劇場に於て開催する
市内西下生徒王勳員にて 中村内政部長 平田少將、熱誠を振る。
諸君の勇んで才一期に起す 全力を奮て戦之下に 及びつて下す。
私諸君へ 乘る飛行機口引受けまじ。銃修に在る者 諸君、奮戦と
期待をせりませ。
終つて映画 鷲鷹の母 観映 解散正午
午右の出征軍人象隊慰安会に赴く 又映画 もうあまそ
勉強の (のうく) 遊んで 戻ら小る身分か

映画短評 大映作品 「鷲鷹の母」

一。映画中心人物。一少年が。日長を格入家から。少年飛行兵を志願して合格
郷に訪向飛行士と志願を遂げると。その時。その少年の母。少年の母。少年の母。
旧世想を脱して。本家の祖父。古川口の人然と。その子。臣等七。心ツコリ灯提象
不吉。和尙。等。少年成長期に於ける種々の出来事。収録ももて
ある。題意。清涼な布と銘打つ。限り無。母の怒り。母の怒り。母の怒り。母の怒り。
その母が。下名に捧げまつるその子が。郷に訪向飛行の晴れ姿。迎へる。
郷堂一同。歡喜。その心を。映画内祖つてである。然し肝腎の
場面(未だ)觀客の中から微笑父(一)南入る。その何故か
余りに飛空人過ると。本家。祖父親子の關係。方かるとか。

19.1.20 記

自分は何違つてゐる。 自分は知つた。 總てと知つた。
 情なき自分である。 馬鹿な自分である。
 愚かな自分よ。 恥ぢよ。 生かされぬ！
 それでもお前は神州男子か。 済ませぬ。
 噫！ 何という 愚かな自分ぞ。 くだはつてしまへ！
 今迄・總てと打拂へ！ それでなければ 死んでしまへ！
 亡女念！ 邪想！ 自己満足や何物でもなかつたか。
 誇張！ 慢心！ 何を 養育へ！
 噫！ 俺は知つたぞ。 總てが判つたぞ。
 愚かであつた。 馬鹿であつた。 自分よ。
 今こそ 精新な 気概で 強切るゝぞ。 死ぬ迄を。
 倒れてもよい。 起き上れぬ迄 頑張り抜くぞ。 何養育D。

一月二十三日 (土) 曇

曇つて居ると嫌な日。 早く暮合はしてしまへ！

お手付けに足が痛く。 嫌な日。 青年団の 話をするにことか

ある。 嫌な一日。 鍛錬公の事。 前田さんへ行かぬは

ならぬ。 さてどうしようか。

一月二十三日 (日) 快晴 温暖

生れて始めて憧れの故郷に行く。 父や叔父始め 細野一族の生、地

を見て 我々に感激す。 あつた。 あつた。 あつた。 總てが懐し。

新家で 衝馳走になり。 歸途 祖父の墓、墓所に 詣り

眼を 一門の人々、靈よ 昇りし。 じつと 祖父の墓、前に 祈れば

何か知らぬが 胸に 込み上げて来た。

そして 心の中に 前途の 安穩を 祈つた。 そして 1日の 暮、成人して

願ひます。 きっと 偉い人になります。 大君の 御役を する人になります。

そして 一門の人々、供養を させて 戴きます。 どうか それ迄。 二の如き

守り下さ。 と 祈つた。 生れて始めて 祖父の前、 願ひ 感激

来てよかつた。 二の御先祖様、爲さる、自分口死るるハハ
 なるるハ、御先祖様に御恩返しをすするぞ。

二の偉大なる天地に生をまかりて下さる御先祖様
 まで、一より御恩返しをす。 どうかそなたで、お身より...

（附記） 自分口後日必ず、祖父の始め、細野一族の菩提と事小
 大供養会、南僧と、場所で行小事を誓うぞ。

一月二十七日（木） 快晴。 久方の仰じま青空
 祝 南東学院創立五周年

午前八時より、人誦堂に於て記念式典を行ふ。
 午後、鎌倉の鎌倉井・水と訪れる。 彼病床と思ふこや
 やけり、勉強が面白くなるらしい。 何しろ自由学園時代の猛烈に
 遊んでお三ヶ月の事、それが三ヶ月（来て、大下、八代等の車中の
 騒ぎは、古強者の自分では、ワザワザ、なつて、新参りの

彼等問題で、全然勉強する気が無い。
 いろいろやっても判らない、判らない、モロやでも、任様が、学校（
 ）ノートに行きおけ、と、黙して、おえ。

手紙、撤回してやって来た。 二人乃、意及地、な、こ、こ、の、野目
 お互に果を、死ぬ迄やれ、そして、花が咲く、の、
 おが、人、の、こ、こ、ま、ま、世話をやける、二、自分か？
 自分口どうぞ、浅回し、おらしの、自分口、

決戦の二月のあと、四日！

二月一八日（七月間）ニそ俺の戦機
 一字ニ又モリも揺がせにす（モヤ

米黨 頑張るぞ！！



二日三三(木) 曇 時々雪

議合に於て 女子徴用問題が騒がれてゐる

東條首相。「我口・衆議制度を保障する為、女子徴用は行はず」

の言明に對し、議員側は、「皇口勤勞觀は是正の日下、急務である

勤勞第三の皇口民として取入の名実合である。この取入の爲実合、

勤勞は決して賤むべきではなからう。現代の女子は、吾等とて、名実合、

之に恥ぢて奮下るゝであらう。政府は速に之をサテ徴用と断行すべきであら

う。譲らず、厚米大臣も、「時機が早い」として、東條を明と一歩

進め、辨明すべき。果して如何なる事にならうか?

愈、明後五日より、暗渠排水工事、勤勞奉仕、於小机中山方面

予虎に狂ちかまると、致さざるに、欣然参加す(し)

二日五日(土) 曇

米鬼マシロ、諸島、クセリン、ルット両島に上陸す

見よ、神州、津領上は、今米鬼・足下に踏まはてしまつた

二の事足は、誰がし出かしのから、一億を、一億が頑強なるからぞ

神州人和島根二千五百年不可侵の口。洋本上は、今こそ侵すべからず

一億より、祖先の御靈に恥ぢよ、敵米鬼・織かす足下に

踏むは碎かれるか、世界新秩序建設者としての歴史を今と塔るか

何れなりや、之が、上則者は、今日歩一歩進めなすつたあるのぞ

今こそ、細く、少くも奮起すべし、頑強なるぞ

腹、断じて奮起すべし、必ず奮起すべし

本日より、愈、暗渠排水工事に出動す、コレは、敵軍上陸す

の報を聴いて、一層、働かす中、艾と、竟や

少年団、合併問題、京師、曲折、愈、難屋、
この原因もや、総て、中野内会不協和、原因万々、
六、数、二、事、云、
ある、俺、口、困、云、

二月十四日(月) 晴

彼、鈴木某より邊信来る。彼恐れ入る人物なり。

彼を評して「絶対的皇民觀と把握せしむる外東京教徒と長い文句

を吐く。その皇民主義、何たるを識す。自證出来得ず。と来りたる。

何と云ふ(癪)に云うてか。長々として事を知つて又出してやつて。

店に大至り温かい大粒威の中にも、その中で得る事の出る力の或物と

求めてゐるものと結論して。

二月十六日(水) 晴

女子挺身隊の記事は近頃の新聞紙上を賑はしてゐる。

愈々口尻總動員が秋、女ナリとも戦士なるを、敵米兵、婦人の生産に

奮闘してゐる。吾大和民族の光榮ある躍進、秋、女ナリとも断然起る

ねらうが、戦局は生易いものでない事を銘記す可し。

女子挺身隊の人員が如何なる。三、絶対的愛国、舌狗口、其心に

あるのみ。只、口を為、情を奉る秋は今なき、驕る米鬼に徹底

的の鉄拳を喰はせり、唯、彼女たゞ、双肩にあるのみ。

南軍が中止流子ヤの出足が鈍る事。自、智識階級を以て任ず、

田舎、深、理解し、チヤリ燃えり(空口)の一丸となつての進軍と

待。

映画評、其の獲王撃て、東京作品、所部豊演出。

日比 俳優合同、米兵捕虜多数出場、比島派遣陸軍報道部後援指導

陸軍省後援、文部省指導、情報局指定、口尻映画家作品、肩書は付けて

一息、映画が、是階見て、二、映画の素材、擲り所、意、断片的な

運が、自分は一息も二息も、演出者、血の心と努力は各所に見られ

米兵捕虜をかくして便の上で、点算、蘇服、他、

● 二の映画、題材は、皇軍占領下の、狂風、枯葉を、巻く、この下、以、

の更感と、情、弱者を、援け、人道の仇と、兄弟情、を、正、に、

その中、米鬼、残虐に、倒れ、比島兵、

の目もおぼろげに、と、画、上、り、て、お。



二月二十六日(土) 快晴

噫 南海の小島と眞紅に染めて 水ま漬く屍六千五百リ。

遂に玉砕せり マーシャル軍備隊ルオットをセリン西島の勇士

今日も明日も 戦闘は苛烈の度を増す耳

ルオット 山田道行少将以下 クエゼリン 秋山内造少将以下

殉口の英霊 六千五百 白果す(し)

悲憤！ 言ふも涙 聴くも涙

この悲しげ、この憤りの中から、次々日本が生れて来る。ぞ

酣新の志士の言葉は、取りも直さず 今吾らの心中に 漲るべき

神州を身北！ 断じて守ル！

この日 勇士玉砕と時と同じくして 非常動員要綱 発表さる

正に待望！ 此こそ待ておろそか 口を以て何、学問ぞ

何を措ても 戦に勝て 勇士を玉砕から救ふぞ

昨日、海軍教官の講話を思ふ

皇口。興隆の唯一君は青年学徒の双肩に懸かておる

値は断じて突破す 断じて行ふ

この人口難の眞只中には、この身を投せ下して 何、男と生れよるぞ

卓なる哉 天地の恩愛 死ぬ運頑張りあるのみ

二月二十六日以降、どうしても書けるなかつた。どうゆう訳か知らぬが、
どうしても書けるなかつた。書けるなかつた。書けるなかつた。書けるなかつた。
どうゆう訳か知らぬが、書けるなかつた。

三月十四日 才松より遠く原町田に疎開せり

この日朝来の降雨に物轉略、断念せしむ。一時牛車の到着より
依然本調子なり。三時半積止り。途中軍田自和車に接觸し、
長坂と苦戦を繰り返して、悪戦苦闘。未、遂に同日真夜中十二時手
新居に到達。

三月二十四日(金) 曇天 北風刺す

我軍印度に侵入せり。皆大本營発表あり
堂々印度口内を征く無敵皇軍の威武。加ふるに感激の印度口民軍
の志気 盛なる哉

四月三日 神武天皇祭(月) 日本晴 暖気溢す

午前九時より丈取鍋のワタ造り作業。思つたよりに出走
十時半頃予苦中、梅叔母さん子供部隊来馬了。悦び、
洋・信・勝・連中、書食の後、大谷の広田さん宛へハシヲ兼野菜
を戴き行く。久し振りに人ばかりと人に浩然の氣を養ふ
連中も、すべかり田園の氣分に、身心共に溶け込んでしまつた
らしい。それより街の方に出る。魚を始り種々珍品?が午に入り
悦まん始め大喜びの偉い見て居ても嬉し
斯く夕食は待望。カマフライ (但使南油、梅叔母さんより賜らもう也)
は又喜ぶ。歡声に響け。連中、大喜ぶ。中の午後八時十三分、
横浜線に歸途に就く。種々お土産も共。

四月四日(火) 晴

始業式 新入生二百數十名を迎へて奉行す。於大講堂

今学期より大に校内全般に亘り刷新が断行され

正に準兵營化也。先づ午前七時十分校庭集會直に口儀儀礼

勅語・勅諭奉唱の後一般体操が實施され八時十分より大講堂に於て

礼拝八時三十分より陸軍に入。教室移動の際に正副取締生徒の

指揮は從隊伍に組み校内外に向ひて生徒心得徹念に計り

勅諭・御精神に生かされ院長訓示。ヤコブ書第百七十七節「人善を行ふこと

正知りて之を行はば専ら罪なし」を身に体し總て行動に「聖句を

表現し又絶対服従の信念に生かされ之等の事々を本学年中の

標題として学校即兵營・生徒即精兵の實踐化を計る言の

告示あり。今迄の自由なる学園平和なる学園緑の学園にも

戦雲漲り米兵野營威の確叫びの軍躍として瀟々として

南太平洋の戦局に打ち我は南洋方面に目を向けて口壇を向

戦局の變轉に目を留めしむる我に三千平傳統の天和魂あり何ぞ中主人

何を怖かん未だ未だ米虫我を我に注ぎ込んぬるもの

我らの目覚めは遅かざるべし(目覚めを時り力にぞ知れ

外口の文化の華を遠く檄擲の力も手達り今こそ

八総一白丁の白主神の教とそや生命と頼んで雄々として起つ上こそ

そして我らが注ぎ込みしものも直派にその生命を血として見よ

オリカの健更り血の雄叫びと坂田院長は言ふ

南東学院創立以来の校訓「人と人との奉仕せよ」今こそその具面目を

發揮するべし一切を奉じて戦力増強に専ら努むるべし

斯くてこそ校訓の生きたるべしと戦に取れて何が学園が

只一管の勝利あるのみ断じて勝つべし遊まるといふ(立起

つたれど立派に立起せよと檄擲の聲が力にぬ櫻花は

咲き誇り朝日に輝き櫻花は

大和男子の熱血の血潮が息吹がそれには照り映えてゐるぞ

四月五日(水)

晴天

絶好のお天気

本学期より一日

何事もなく

教科書が到着して一向興味無し

騒々しい組の連中(註 本年度より従来の三組制度(受験組)廃止で

全体的に平均学力に組が編成改組せられ旧三三三制より一三三制に改組)

田中、飯村、熊倉等の同志と別る)面白くなる日

おまけに副組長に任命され又この嫌な事が増える

一休、謙が三組制度に廃止せられた。八木、伊沢が、教頭が、何かその辺り

合子に過ぎぬであらう)あつ思ふは三組は懐しかった。全員一致、えんが漸く

漲る来をばかりなのをよみて軍人組三組り止り出るやうな猛勢が期待される

の。始何にも口惜しい。心残りだ。折角三年迄続いたのもう一年

残り二年ももうよまらうなものだ。当分の間勉強も面白くなることだ。

親友戸塚兄、手紙

久しぶりで兵分がせくしよ。よくもあはれぢりものかま首けしぬ。

僕は今更乍ら君。熱情に驚きよ。何を知らねがすんく引き蒸け

ら小てゆくやうな気がしてハツと気がついて時一はもう三分の一位の位を過ぎて

しまつたわ。君。描寫カはもう押しも押されぬ。僕など足元にも及ばない

だらう。しかしい。題材を見つけたわ。真実、ヒソカ言ひたい。今迄の

君。作品は題材が全然なつてなかつたか。(失礼カク) よくもそんなやつで

見たすと思つて敬服に至りぬ。君が強くてと言ふらう。思ひ切つて書くと

まあわざと異れ給へ。決して君にあてつけに書くのではなかつた。

あそこの多シ川畔の情景が描寫カはよが。二人。今話かじらも

腑に落ちる。惠美子、小女性口もつて、少くもニハ以て別に出てきた惠美子

口大まか盡かれていながらな。いさなりあんな女性に扱かれて一寸皮肉を

あつ時の惠美子、氣持としては、あつ時見えよ。一草一本、あつちよものか。激しい

息吹の真中にあつちよに思つて違ひぬ。あつちよ余りに可愛さうな。

あつちよ美子、少くも女学校一二年頃の子供に、扱げられる。噂少せどこか

思ひつか。又君の人性兩出論論によつて、あつちよも、あつちよも、あつちよも、

君の肝臓をクラエタ。違ひると買けてしまふが。今度ばかりは、その探子

かつとも見える。單壯カ君、努力がよく判る。然し(又厚顔の至り多謝)

あつちよ行合の晩より出齊に至るところ、返口あまり單調。あつちよやうな

辨行合、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

然し破りなつてつややと思つた。いさなりでもつけうれさうな。あつちよ、

余り長くなるが、いさなり加減にするが、暫く休んどうらうな。海兵受験も控えて

相当無理をよ。僕が八月まで止める。もともとも書くと気がたつたわ。

何と言つてあつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、

あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、あつちよ、